

元禄・宝永期の平太郎伝淨瑠璃

—『都三十三間堂棟由来』と『和合之名号』—

沙 加 戸 弘

はじめに

元禄末年から宝永初年にかけて、一つの平太郎伝淨瑠璃が一人の作者によつて世に送られた。『都三十三間堂棟由來』(以下『棟由來』と略称する)と『和合之名号』である。作者は山本弥三五郎(飛驒掾重任河内掾)、所属は『棟由來』が伊藤出羽掾、『和合之名号』も出羽系と思しい。

平太郎伝淨瑠璃は、真宗関係淨瑠璃の興行・出版が東本願寺の介入を招き、結果親鸞系淨瑠璃と平太郎系淨瑠璃に分かれ独立・専門化したことを述べた前稿において指摘したように、延宝年中に至つて首尾一貫した内容を持つに至つたが、その展開には、基本的な事項を踏襲しつつ増補す

る、という原則を見出すことができる。基本的な事項とは、具体的には「仕える主人と共に平太郎が熊野参詣をする」ということなのであるが、その伝統的な平太郎伝淨瑠璃の最終段階に位するのが『棟由來』であり、平太郎伝に名は借りているものの、それまでの原則を無視した新しい型の平太郎伝淨瑠璃が『和合之名号』である。

本稿では、いずれも正徳元年の親鸞四百五十回忌法要をあてこんだと推定される、同一作者による対照的な平太郎伝淨瑠璃二作に焦点をあてて、その性格を考えてみたい。

『棟由來』については前稿^④において、後白河法皇五百年

忌をあてこんだ元禄四年の上演かと推定したが、それは誤りである。平野屋七兵衛刊の正本内題下に「作者山本河内掾」とある。山本弥三五郎が「飛驒掾 源清賢」を受領したのは元禄十三年⁽⁵⁾であり、重ねて河内掾を受領したのは元禄十六年のことと推定されるから、どう考へても『棟由来』は元禄十六年以降でなければならない。

さて、この『棟由来』は、前書きにふれたように、非常に伝統的な平太郎伝淨瑠璃である。寛永古活字版『しんらんき』を嚆矢とする真宗関係淨瑠璃の中で、親鸞伝と一体で形成され、後親鸞伝から独立した過程——『しんらんき』、『よこそねの平太郎』、『熊野権現開帳⁽⁷⁾』と展開する——の延長線上に位置すると言える。内容も、出羽掾による延宝末年の『熊野権現開帳付平太郎きすい物語⁽⁸⁾』とほとんど変わらない。若月保治氏の『古淨瑠璃の研究』第四巻にも紹介があるが、論展開の都合上大略を述べておこう。

第一 蓮花王坊熊野山に三山百度の立願、行場の柳と柳の連理の枝を切り、恨をもつた柳の精のために投げ

られ谷の一本に突き貫かれて絶命するが、後白河法皇に転生、柳は曾根の清太郎に転生する。

紀伊国押領使湯浅権守宗重の娘豊日の前は、上総の国曾根家富の次男千寿丸を婿にと定められていた

が、家富が討たれ、清太郎は仇をたずね、弟は出家し共に出国したため、改めて籤によつて婚定めをするが、宗重の甥和田四郎の邪計により破綻、陰謀あらわれた和田四郎は追放される。

宗重は姫を伴い上洛の途次、鷹狩をするが秘藏の鷹が柳の梢に足緒をからませる。折から熊野参詣をしていた清太郎が弓で足緒を射切り、宗重に召抱えられる。騒ぎの間に姫が和田四郎一味に奪われるが、清太郎外家臣の働きで事無きを得る。

第一 清太郎は宗重に伴れて上洛し、湯浅家の他の家臣とひき合わされるが、御家の弓の師多熊の入道がん石に妬まれ口論、的矢の勝負をする事になる。試合中、がん石こそたずねる父の仇土井原刑部左衛門であることが判明、清太郎は仇を討つ。

がん石の門弟につけねらわれるため、清太郎は致仕し熊野へ遁れる。山中で若い女に助けられ、清太郎はこの女と契を結ぶ。

第三 その頃では、後白河法皇の頭風頻りであった。

法皇は因幡堂平等寺の薬師如来に七日間の参籠をする。七日満する晩に、「御身の前生は蓮花王坊であつた。三山百度の願を立て、今一度という時慢心萌

し、谷の一木に貫かれて絶命した。その蓮花王坊の頭蓋骨が身を貫いた柳の木に残り、風が吹くと騒ぐので頭風が甚しいのである。急ぎその柳を伐って都へ運び、廃れたる靈地を復興して一字の御堂を建立し、千手観音を作つて阿弥陀上人範宴を以て供養せよ。」といふ夢告を受ける。熊野へ参詣した阿弥陀上人も同じ靈夢を蒙る。

一方、熊野山中で清太郎は女と穩やかに暮し、今は緑丸という子がある。女は柳の精であった。法皇の願によつて柳の木が伐られると聞き、悲しみにくれながら蓮花王坊の頭蓋骨を清太郎に渡して消える。やがて院宣を蒙つた湯浅権守は、熊野へ入り柳を切つて、曳こうとするが動かない。そこへ清太郎父子が通りかかり、經緯を話して柳を曳く。大木は易々と動き都まで運ばれる。

第四 豊日の前狂女道行。所用あつて東寺の側を通りかかる阿弥陀上人、狂女となつた豊日の前と行き合ひ、常八郎と名を替へ上人の弟子となつてゐた千寿丸に介抱させる。折ふし通りかかった和田四郎が姫を奪おうとするが、関東筑波から來た巡礼二人に追い払われ、姫は湯浅の家人宮内左衛門に介抱される。

丁度そこへ、院使大納言友房卿が、湯浅権守・清太郎等をつれて、院宣を伝えるため阿弥陀上人の寺へ行こうと通りかかる。院使友房卿は、鳥羽院の御願所得長寿院を復興し、件の柳を棟に引き、三千三百の觀音を安置するとの院宣を伝え、併せて常八郎(千寿丸)を改めて湯浅家の婿にと願う。よつて千寿丸は湯浅の婿となる。

かくて御堂成就し、建仁元年甲申二月二十七日に法要が営まれ、阿弥陀上人が説法する。和田四郎も改心し柳の精も成仏して、法皇の頭風も平癒する。寺は頭風山平癒寺蓮花王院と名付けられる。

第五 法皇は清太郎を案内として熊野へ参詣、証誠殿にて通夜。法皇・清太郎同夢の中に清太郎に権現直の対面、一身不淨にしては念佛の功空しとの神勅がある。そこへ阿弥陀上人来臨、念佛にまさる功德はないと釈があつて法皇・清太郎共に夢からさめる。法皇は念佛の行者として出家を立願する。請に応じて阿弥陀上人来現、法皇は出家を遂げ権現に直の対面、九十九所の王子に残らず参詣し都へ還御。

二

以上の大略で明らかのように、この『棟由来』は、伝統的な平太郎伝——平太郎の熊野参詣を素材しながら、念佛と神祇とのかわり及び念佛の功德を説くことを主眼とする——を増補したものである。その粉本となつたものは、まずまちがいなく延宝末年の伊藤出羽掾正本『熊野權現開帳付平太郎きすい物語』であろう。

逆に言えば『棟由来』は、『熊野權現開帳付平太郎きすい物語』に、湯浅権守宗重の娘豊日の前と曾根の清太郎の弟千寿丸をめぐる部分、及び阿弥陀上人につかわる部分を加えたものである。増補部分以外は『熊野權現開帳付平太郎きすい物語』を多く踏襲している。文辞の一致も少くない。

その増補の意図は、第一に、清太郎と柳の精との異種婚譚の他に、今一つ恋物語を加えはなやかさを強調したこと、第二に、阿弥陀上人を全体の仏教的統一の要としてすえたこと、と要約できる。全体のはなやかさを増すための恋物語は今暫く措き、阿弥陀上人の増補はこの『棟由来』一曲の主題とかかわると思われるので、以下展開に従つて二、三の部分について検討してみよう。

この阿弥陀上人、もしくは阿弥陀上人的存在は、先行の

二作、加賀掾本『熊野權現開帳』と出羽掾本『熊野權現開帳付平太郎きすい物語』にはほとんど登場せず、延宝期の親鸞伝・平太郎伝の独立・専門化を裏付けるのであるが、この『棟由来』に至つて復活する。それも、少々のカムフラージュは施されているものの、この阿弥陀上人は親鸞である、ということははつきりわかる形で、一曲の中心的地位に復活したのである。

まず、平太郎伝淨瑠璃である『棟由来』の中で、平太郎（この作では清太郎）の師として描かれる阿弥陀上人、ということになればその位置、その名から、当然これは親鸞に擬されていること論を俟たないが、加えて『棟由来』においては、後白河法皇に対する因幡薬師の夢告の中で、

「いそぎかの柳を切て都にのぼし。此木を以てすたれたる靈地に。一字の御堂を建立し。千手觀音を作りこめ。きへ僧阿ミだ沙門はんえんを以て。かのかうべをもくやうあらば。づふうへいゆうたがひなしと。」（『棟由来』第三傍点筆者）

と語られている。言うまでもなく、「はんえん」とは、親鸞の出家得度の時の名として、『本願寺聖人伝絵』（御伝鈔）その他で真宗門徒には耳なれた名である。つまり作者・山本河内掾は、この阿弥陀上人は親鸞である、と明言してい

ることになる。

同時にこの夢告において、先行二作⑧いすれも天台座主「ちうしゅん」僧正であった、蓮花王院御堂成就供養の導師もまた、阿弥陀上人に定められる。先行二作においては、御堂供養の場になつて突然「ちうしゅん」が登場するのであるが、『棟由来』では、因幡夢告の場から後白河法皇の「きへ僧」として、阿弥陀上人が描かれる。

次に『棟由来』第四の「とよひの前狂女道行」に続く部分、阿弥陀上人に行き合つた豊日の前を和田四郎がさらつて行こうとする場面では、東国の巡礼二人が助けに入る。その巡礼は、

「爰なやらふハ何をしめす。うんども常州つくばの者ぞ。——中略——アノおぼん様ハうん共がが国でハ。」

阿弘陀様とゆつて。たつとんだるおかた」と語り、流罪勅免後常陸へ教化に赴いた親鸞を想起させる。続いて、御堂供養の法会に際しての阿弥陀上人の説法も、古活字版『しんらんき』以来使われてきた説法が、文辞もほとんどそのまま使われている。

さらに、阿弥陀上人は、最後の後白河法皇の熊野参詣の場にも登場する。先行二作においてはほとんど登場しない、あるいは登場しないと推定されるにもかかわらず、この

『棟由来』では、大略に記したように、権現が平太郎に直に対面して一身の不淨を指弾し、それに応じて阿弥陀上人が忽然とあらわれ念佛を祝する、という真宗道場における平太郎説話の型になつていて。この出来事に触発され、法皇は出家を望むが、その戒師として再び阿弥陀上人は表現するのである。

なお、瑣末なことではあるが、御堂供養の年月日の問題にふれておきたい。蓮花王院の事は、湯浅権守宗重同様、後白河法皇や平家をめぐる諸書に散見する。『愚管抄』には、「サテ後白河院ハ多年ノ御宿願ニテ、千手觀音千體ノ御堂ヲツクリテオボシメシケルヲバ、清盛奉リテ備

前國ニテツクリテマイラセケレバ、長寛二年十二月十七日ニ供養アリケルニ」

とある。出羽掾本『熊野權現開帳付平太郎きつい物語』は

「比ハてうくはん二年きのゑさる一月廿七日」

であり、加賀掾本『熊野權現開帳』は

「ころはちやうくはん二年きのへさる一月廿七日」

である。『愚管抄』等と日付は異つて、もの、両者一致して「長寛二年甲申一月一十七日」であるのに對し、『棟由来』では

「比ハ建仁元年甲申一月すへの七日」

となつてゐる。先行二作に比して、年号だけが変更されてゐる。当然の事ながら、建仁元年は甲申ではない。干支・月日はそのままに、なぜ年号が長寛二年から建仁元年になつたのであろうか。建仁元年は、親鸞の『顯淨土眞實教行證文類』⁽¹⁾後序において、

「棄^チ雜行^ハ、劣歸^ハ本願^ニ」

と記される年、また西本願寺本『善信聖人繪』⁽²⁾あるいは流布本の『本願寺聖人親鸞伝繪』では、「第二段 吉水入室」⁽³⁾とされる年、つまり真宗門徒にとつては「範宴」という名同様耳なれた年号であった。

以上のことを考えあわせると、この『棟由来』は、平太郎伝淨瑠璃でありながら親鸞伝を排除しすぎた延宝期の先行作『熊野權現開帳付平太郎きつい物語』に對して、阿弥陀上人（親鸞）の描き方は及び腰ではあるものの、本来の平太郎伝への回帰を意図した作、言葉をかえて言うならば、『しんらんき』以後増補してきた平太郎伝のはなやかさをそのままに、親鸞四百五十年の法要を目前にして、真宗門徒向けの色彩を強めた作、といふことが言えよう。

ところが、同一年代に同一作者によつて世に送られた平

太郎伝淨瑠璃『和合之名号』⁽⁴⁾は、平太郎の弟が登場して身分ある人の娘と縁を結ぶ、という点で『棟由来』と構成上の共通点を持つものの、全体は兄弟をめぐる御家騒動に仕立てられており、それまでの平太郎伝とは全く異質の、真宗関係淨瑠璃としては珍しく孤立した作である。やや煩しくなるが概略を追つてみよう。

④ 音曾根の次男平次郎は、怪我によつて足が立たなくなつた義兄平太郎の薬として実母の指示した古鳶の尾羽を求めて愛宕山に登り、しきみが原で異形の客僧に会う。客僧は、この山の鳥は權現の使いであるからとつてはいけない、早く下山せよと叱る。平次郎が聞き入れないと見るや客僧は大きな化鳥となる。望む獲物と平次郎が剣を抜いてとびかかると、化鳥は翼をたれ尾羽を与える。汝には仏縁がある。再び廻り会おうと言つて消える。直後、平次郎はその場で氣を失い、夢の中に天狗道に墮し耐え難い苦を受け、見知らぬ僧の呼聲で救われる。僧は、夢から醒めた平次郎に、母が先妻の子平太郎を疎んじ、毒害して音曾根の家を平次郎に継がせようとしていると告げ、汝の求める鳶の尾羽は毒薬である、孝心があるなら諫言して母と共に出家せよと諭して消える。發心した平次郎は捕えた鳥を放

三

つ。

そもそも、音曾根の平太郎というのは、桓武天皇の皇子賀陽親王の苗裔で、音曾根監物好春の子である。監物好春は禁中一の絵師であつたが早く世を去り、平太郎が跡を継いだのであるが、勅願の宝塔の絵を描いていた時誤って落ち、以来足腰立たず、今先祖の惣廟敷の森の社に籠つて祈願の日々を送つてゐる。

ここにまた、梅園刑部丞有乗の娘月輪姫は、弟平次郎に思いを寄せ、音曾根の兄弟が宮籠と聞いて、平次郎に逢おうと社へたずねて来る。音曾根の家老右金五友親の女房が相手をするところへ、平次郎の母及びその弟で社の神主悪太夫がたずねて来る。二人は平太郎に対面し、病平癒の妙薬と偽つて毒を飲ませようとするが、友親の女房に遮られる。そこへ友親が佯狂となつて禁中より帰る。佯狂は月輪姫と平次郎との恋を包む方便であったが、母・悪太夫はよい折とまず友親を失おうと計る。が果らず、さらに平太郎・友親夫婦ともども殺害しようと謀をめぐらす。それを事前に知つた友親は、女房をあとに残し平太郎を背にして身を隠す。

多くの侍と共にやつて来た母、悪太夫の前に平次郎

が立ちふさがり、叔父の悪心を諫め母に出家を勧め、自分も髪を切る。そこへ月輪姫が走り出、慕う者を残しての出家は酷いとかきくどく。悪太夫は常々姫に心をかけていたので、よい折と平次郎と姫を取り籠めてしまうが、姫の方は友親の女房が智略でとりもどし館へ送る。

翌朝、里人の要請で、忘れていた神事の用意をしていた悪太夫のところへ、一人の僧があらわれ、悪太夫が音曾根の家の乘取りを企んでいることを発き、取り籠めた平次郎も音曾根の家宝ももどせと叱りつける。悪太夫は驚いて平次郎のいましめを解き、家宝を返して逃げる。

僧は愛宕山しきみが原で平次郎と会つた僧であつたが、一向専修念佛の行者ならば苦しからずと、平次郎と月輪姫の縁を結ばせる。この僧、実は愛宕山の太郎坊であつた。

④ 友親夫婦は平太郎を友親の弟として紀州湯崎の温泉に伴い、病を養わせる。ある日、友親が外出したすきに、地頭に仕える横田弥八という者が鳥籠に入れた杜鵑を持参し、主人の一人子の疱瘡による耳眼の失を直すため鳴かせてほしいと申出る。平太郎が

鏡を使って鳴かせると、弥八はそれこそ悪太夫から依頼のあつた平太郎である証である、と言う。弥八は平太郎を討とうとするが、逆に友親の女房に討たれて死に、友親の女房も深傷を負う。弥八の加勢がやつて来るが、友親も帰りあわせ、鏡を使って追い払う。

ここも安全ではないと夜にまぎれて落ちてゆく途中、女房は死んでしまう。それを知った平太郎は、その甲斐もないのに自分が生きている故、罪もない人が死ぬ、自害しようと思い定め、自分の太刀を友親の女房の弔の布施にとさし出し、さらに友親の頑健さにあやかりたいと守袋を交換し、友親が女房の死骸に寄る鳥を追いう隙を見て自害する。

友親が歎き悲しんでいるところへ、平太郎・友親を求めて紀州へ下る途中の継母・悪太夫及び侍共が行き合う。友親は所詮死ぬべし我身なればと、宝鏡を池の龍神に奉り、平太郎と女房の死骸も同じく池水に沈め、死にもの狂いの働きをする。継母・悪太夫・侍共を悉く斬り捨て、自害しようとした時、龍神が姿をあらわし、鏡によつて天上の果をうけた、この報恩に二人の者に寿命を与える病消滅なさしめる、と言つて消えると、大蛇が一人を岸へと上げた。平太郎の足も女房の傷も

癒えていた。三人は喜んで都へと帰った。

家おさまつて、平太郎は音曾根の家を継ぎ、平次郎は梅園刑部丞有乗の婿となつて一向専修念佛の行者となつた。平太郎は遊宴を続けたが、ある日弟平次郎しんぐう坊から、明日共に愛宕山へ登山しようと誘われる。平太郎は同意せず遊興にふける。その宴で音曲を聞く中睡に誘われた平太郎は、弟平次郎と愛宕山に登り名所を廻るうちに、『仏說譬喻經』そのままに人間の苦を具に味わい、真仏より早く仏道に入れという示しを受けて念佛の行者となる、という夢を見る。睡から覚めると夢の前と全く変らず音曲は続いていたが、夢の中の御告の声と奏者の声とが同じであることに平太郎が不審を抱くと、奏者は、越後の親鸞聖人の御弟子となれ、と言つて愛宕將軍地蔵權現の姿をあらわして消える。

⑤ 音曾根の平太郎・平次郎の兄弟は、親鸞聖人の弟子となつた。勅命によつて真仏上人・しんくう上人と号を賜り、音曾根の遺跡を両僧に分け、二字の御堂が建立される。

御堂供養の日、一転して悪天候となり、西の空より平次郎の母の生首があらわれ、音曾根の家を丸取りに

して平次郎に与えようとしたのに果さず、今修羅の苦患に会っている。瞞恚の炎で継子平太郎の道場を焼いて怨を晴らそう、と言う。そこへ東方から、平太郎の母の生首があらわれ、子故に迷う親心は同じである。子が衆生済度するのを妨げるな、と言つて互に争いながら消える。真仏・しんくう共に合掌すると、御堂にかけてあつた聖徳太子の御影から御姿があらわれ、二子孝養の功德によつて二人の母も仏果を得るとの仰があつて、二人の母は阿弥陀仏の姿となり聖徳太子の姿と共に光輝く。

四

この『和合之名号』の概略を追つてまず氣のつくことは、その固有名詞が、真宗関係淨瑠璃伝統のものである、といふ点である。「親鸞」、「平太郎」、「真仏」の名は改めて説明するまでもない。「しんくう」(あるいは「しんぐう」)は、延宝七年の加賀掾正本『他力本願記』、また先行作出羽掾本『熊野權現開帳付平太郎きすい物語』にその名が見える。「月輪姫」は、親鸞の伝説上の妻、月輪関白兼実の娘玉日から、その父「有乗」も親鸞の父日野有範から来ている。さらに「愛宕山」は月輪関白の旧地と伝えられている。寺

伝によれば、天応元年慶俊の開基で、その時土中から宝鏡が出たとある。この作中に鏡が大きな役割を果すのもその故かと思われる。従つてこの淨瑠璃が、対象観客まで含めて真宗関係淨瑠璃の伝統に立つ、あるいは立とうとしていることだけは明らかである。

しかしながら、前述のような固有名詞はともかく、全体の結構はと見渡すと、やはり平太郎伝淨瑠璃として非常に奇異である、という感が強い。淨瑠璃史上はじめて熊野と関わりを持たない平太郎が登場したからである。つまりこの『和合之名号』には、それまでの真宗関係淨瑠璃・平太郎伝淨瑠璃にはなかつた新しい意図が盛られているのではないか、と考えざるを得ないのである。

母が継子である兄を疎んじ、実子である弟に家督を継がせようと企て、兄は一時退隱するがやがて世に出る機を得、兄弟共に上人となり東西に門徒寺ができる、というこの筋立てによつて想到するのは、文禄から慶長にかけての本願寺の動きである。本願寺は慶長年間、東西に分立した。

『大谷嫡流実記』^⑯等によれば、文禄元年十一月本願寺第十一代宗主顕如(本願寺光佐)が寂し、長子教如が襲職したが、教如は母如春尼に疎まれ、秀吉の命によつて隠居し、弟准如が住持職を襲つた。後、慶長七年、家康が教如に京

都六条の寺地を寄進し、ここに烏丸の本願寺（東本願寺）が成立した、というのがその大略である。

今、本願寺の東西分立について、その背景・経緯等詳しく述べる余裕を持たないが、ただこの如春尼教如母子の不和をめぐって、古来如春繼母説があり、『日本佛教史』第七卷「近世篇一」には同説紹介のため、数種の史料が列挙してある。信頼し得る史料は、一致して教如・准如同腹としている。信頼し得る史料は、一致して教如・准如同腹としている故、この説が風聞の域を出ないことは疑えないが、教如繼子説が古くからあつたことは重要である。淨瑠璃制作上の大好きな要素となつたと考え得るからである。

今一つ、『和合之名号』中の、平太郎の紀州療養も、教如の石山退城・紀伊下向と符合している。

この繼母による長子廃嫡、長子の退隱と、⑦に至つての「二字の御堂をこんりう有。上人がうを給ハリ。東西に居住ある。」

といの一文とよつて、『和合之名号』の平太郎伝はまさしく教如伝となる。

要するに『和合之名号』は、親鸞・平太郎（真仏）の時代に名を借りつつ、本願寺の東西分立という新しい時代の淨瑠璃を作り上げたのである。無論、この手法は、時代淨瑠璃として特異なものではない。が、真宗関係淨瑠璃という

限られた枠の中で見る時、テーマ・素材として、七高僧の他には親鸞・信空・真仏・源海と、ほとんど同時代そして同系列の四人に限られていた状態から、新たに新しい時代の本願寺系統の歴代宗主伝へと展開する可能性を示した、ということは言い得よう。

しかし同時に、熊野へ参詣しない平太郎の登場は、平太郎伝淨瑠璃が、『しんらんき』以来連綿と続いてきた熊野の呪縛から解き放たれたことも意味している。逆に見れば、これは淨瑠璃における「やくそくごと」の無視であり、「平太郎」という名の享受の歴史を踏み外したことである。

この試みがいかに大胆なものであったかは、この作品の外には平太郎と熊野を切り離した作が全くない、ということで明らかである。必然的に、この作品においては、「平太郎」という主人公及びその名の持つ意味も大きく変つて来るを得ないが、この問題については稿を改めたい。

む す び

以上、元禄末年から宝永にかけてといふ、親鸞四百五十年を目前にした時期に、全く異質な二つの平太郎伝淨瑠璃が、同じ作者によつて世に送られたことを述べた。

一作は先祖がえりとでも言うべき真宗道場的平太郎伝で

あり、今一作は教如伝であった。本願寺の分立を題材に、東西両本願寺の繁盛を祝つたのである。

この二つの平太郎伝の際立った質の違いは、元禄・宝永期の淨瑠璃興行界が親鸞四百五十年というものにできるだけ幅広い対応をしようとしたことの証であろう。

また、この二作が同一の作者である、というのは様々な問題を含むと思われるが、その山本河内掾には不明の部分が多い。元禄・宝永期の演劇・興行及び京都の真宗教団の状況と併せ課題としたい。

註

- ① 東洋文庫蔵。
- ② 国立国会図書館蔵。
- ③ 拙稿「平太郎伝の展開——淨瑠璃を中心として——」(『大谷学報』第五十九巻第二号)
- ④ 注③と同じ。
- ⑤ 『古典文庫第一六九冊 古淨瑠璃集 角太失正本(?)』所収「山本角太夫について」(信多純一氏稿)による。
- ⑥ 同じ飛驒掾の『文七一周忌』脇方簽による。
- ⑦ 加賀掾正本『熊野権現開帳』(天理図書館蔵)と東大本『熊野権現開帳付平太郎きすい物語』との前後関係について、前稿(注③)では加賀掾正本先行と判断したが、その後『古淨瑠璃正本集 第九』(角川書店刊)所収の『熊野権現開帳付平
- ⑧ 加賀掾本「天だいざす、どうやうばうちうしゅんそうじやう」、出羽掾本「天たいのざす、どうやう坊のちうしゅん僧正」。
- ⑨ 岩波書店刊『日本古典文学大系 86 愚管抄』による。
- ⑩ 角川書店刊『古淨瑠璃正本集 第九』による。
- ⑪ 天理図書館交付のポジフィルムによる。
- ⑫ 法藏館刊『定本 親鸞聖人全集 第一巻』による。
- ⑬ 史籍刊行会刊『古淨瑠璃の研究』による。
- ⑭ この正本について、前稿では延宝期の作と考えたが、これは誤りである。『古淨瑠璃の研究』の追加篇に、この正本と同一内容を持つ『あたご將軍地蔵』という外題の本が紹介してあり、その奥に「上り作者 源清賢」とある、と解題にある。『あたご將軍地蔵』は未だ見る機会を得ないが、「源清賢」とあれば飛驒掾であるから、元禄十三年以後、ということになる。
- ⑮ 同朋舎刊『真宗史料集成 第七卷 伝記・系図』による。
- ⑯ 岩波書店刊、辻善之助著。
- ⑰ ただし、教如の紀伊下向は東西分立と直接関係はなく、織

太郎きすい物語』解題において、この東大本が出羽掾正本であることが明らかにされ、かつこの正本及び加賀掾正本に先行する出羽掾正本の存在が推定・指摘された。従って、先行出羽掾正本のあとに、加賀掾本(天理本)と複刻出羽掾正本(東大本)が位置することになる。前稿の誤を訂正させていただく。

田信長との対坑から生じたものであり、かつ父頭如の在世中の事である。雜賀崎には教如が隠れたと伝えられる「上人窟」が今も残る。

○この稿をなすにあたり、東洋文庫、国会図書館、天理図書館、

東京大学図書館の御好意をいただいた。なお、大阪大学の信多純一先生、大阪市立大学の阪口弘之先生に貴重な資料を拝借し御教示をいただいた。記して御礼申し上げる。

(本学助手 国文学)